

令和2年度

美甘地域振興計画

～観光地域づくりに向けて～

令和3年3月

美甘振興局

目次

- 1章 美甘地域の概要
- 2章 真庭市の関連計画や美甘地域での取組
- 3章 美甘地域の現状と課題
- 4章 美甘地域振興のための方向・取組
- 5章 経済波及効果

1章 美甘地域の概要

真庭市は岡山県の北部に位置しており、平成17年3月31日に9市町村の合併により誕生した自治体で、総面積828km²と岡山県では最大の面積を有しており、その内約8割が森林で、森林資源を活かした林業木材産業が盛んな典型的な中山間地域である。

本計画の対象地域である美甘地域は、真庭市の北西部に位置する総面積67.19km²の地域であり、地勢は極めて複雑且つ急峻であり各所に800m以上の山々がそびえ標高300m~600m地点に集落が分布している。

土地利用は、面積の90%超が林野で占め旭川の支流新庄川沿いに集落と農地が分布している。地質は花崗岩が全体の60%を占め、安山岩、古成層の準片岩、蛇紋岩地帯が分布し、これらの風化により形成された壤土が主体をなしている。

気候は、中国背稜山地を擁する山岳地帯のため、冬期は低温に見舞われ降雪量も多く、30cmを超えて根雪期間も長く、農業は高冷地農業地帯となっている。

夏は冷涼な気候であるが、秋は山陰型の時雨に見舞われる等積雪寒冷地帯涼地である。

歴史的には、本地域は出雲街道の宿場街で、山陰と山陽を結ぶ要衝の地であった。明治の初めまでは美作国美甘郷に属し、美甘村の町分、在分、麓分を統合し、美甘村が誕生した。

明治22年(1889年)には美甘村、鉄山村、黒田村、田口村、延風村が合併し、美甘村が誕生しています。

本地域における産業は、山里ならではの多様な農林産資源に恵まれていることから農林業を基幹産業としており、林業分野においては、新たな林業経営モデルの実証地として事業推進が図られ、農業分野においては、ヒメノモチ(もち米)を中心に、作物の品質を重視したこだわりを持つ生産者が多く、新たな製品の掘り起こしや、地域産品の高付加価値化へ向けた検討がされるなど、豊かな地域資源を活用した地域づくりを進めている。しかし、人口減少社会にあって、2010年の国勢調査で1,405人であった人口も2015年には1,242人と5年間で11.6%減少しており、真庭市内でも人口減少率が大きくなっている地域で、3つの減少段階を経て進むとされている人口減少の段階も、全ての年齢層で減少する「第3段階」に入っており、2040年には現在の人口規模の半数以下の533人となることも予測されていることから、地域の活力の低下による地域の持続可能性が



危惧されています。

2章 真庭市の関連計画や美甘地域での取組

1 第2次真庭市総合計画

真庭市では、市の最上位計画として2015年に「第2次真庭市総合計画」を策定（2020年12月改訂）している。同計画では「誇り」「許容性」「持続可能性」「安全安心」「教育」を基本理念とし、市民一人ひとりの多彩で豊かな生活を重視した「真庭ライフスタイル」の提案を行っている。また地域・観光振興に関して、「多彩で循環性のある持続可能なまち」を目指し、「多彩な地域の個性を育てる」「地域資源を活かした「回る経済」を確立する」ことを示している。

第2次真庭市総合計画における地域・観光振興に関する記載（例）

第5節 多彩で循環性のある持続可能なまち

第1項 多彩な地域の個性を育てる

【施策の方向性と目標】

- 真庭市の自然、歴史、文化などを見つめ直し、維持保全し、伝承し、地域資源を活かした魅力的なライフスタイルを提案していきます。
- 「ひと」と「ひと」、地域と地域の交流により、互いの魅力を認め合うことで、各地域にあった魅力的なライフスタイルが市民の手でつくられていくよう支援します。
- 地域資源を見つめ直し、「掘り起こし（発掘・創出）」や「磨き」「連携（組み合わせ）」により、地域の活性化を進めます。
- 「ひと」と「市役所」が、交流や連携を通じ真庭市への誇りや愛情を持ち、一体となってさまざまなメディアを活用した情報発信に取り組みます。
- 自然環境や里山風景を将来に継承していくため、里山の担い手を育成していきます。

第2項 地域資源を活かした「回る経済」を確立する

【施策の方向性と目標】

- 農林畜産物や景観、文化、伝統などの地域資源を組み合わせた新しい観光の取り組みを支援し、「回る経済」の中の産業として強化します。

（出所）真庭市「第2次真庭市総合計画」

2 真庭市観光戦略及びアクションプラン

真庭市及び一般社団法人真庭観光連盟（現：一般社団法人真庭観光局）では、市の観光誘客数が低下傾向にあり、基幹産業の一つである観光産業のより一層の活性化が必要であることを踏まえ、2017年に「真庭市観光戦略」を策定している。同計画では「住んでよし、訪れてよし」の観光地域づくりを観光振興の基盤に据え、「市民が誇りに思える観光」「回る経済の仕組みの構築」「地域間の相乗効果」等を方向性として示している。

真庭市観光戦略の概要（抜粋）

●真庭市のあるべき姿、ありたい姿
① 自己実現を果たし、社会で活躍する生き生きとした「人」がいること。 ② 豊かな「自然」と人とが共存する循環型の暮らしがあること。 ③ 市民が地域に「誇り」をもっていること。 ④ 顔の見える人と人との関係があり「風通しの良い」地域社会であること。 ⑤ お互いの関係により、地域社会が「安心・安全」であること。
●真庭市の地域課題を解決する「観光地域づくり」への期待
① 観光・交流により市民の活躍の場ができ、住民同士のコミュニケーションも活発になる。 ② 地域の魅力を市民が再認識し、若者流出抑制が期待できる。 ③ 「回る経済」の仕組みを構築する。 ④ 旅行者への演出の取組を通して、住環境や景観が維持・改善される。 ⑤ 広範囲に及ぶ取組を通して相乗効果が生まれる。
●独自の価値を活かした「観光地域づくり」を進めるための具体的計画
① 地域の魅力（独自の価値）の再認識とブラッシュアップ ② 地域の魅力（独自の価値）の発信 ③ 旅行者（お客様）を滞在・回遊させるための工夫 ④ 「観光」を産業にする工夫 ⑤ 受入環境整備

（出所）真庭市及び一般社団法人真庭観光連盟「真庭市観光戦略」

さらに観光戦略を推進するためのアクションプランを策定しているが、その 中では、「RESAS」や「観光予報プラットフォーム」等のビックデータを活用し、観光客の動向を把握し、分析のうえで対応策を検討している。過去5年の推移を基に現状をした結果は次のとおりである。

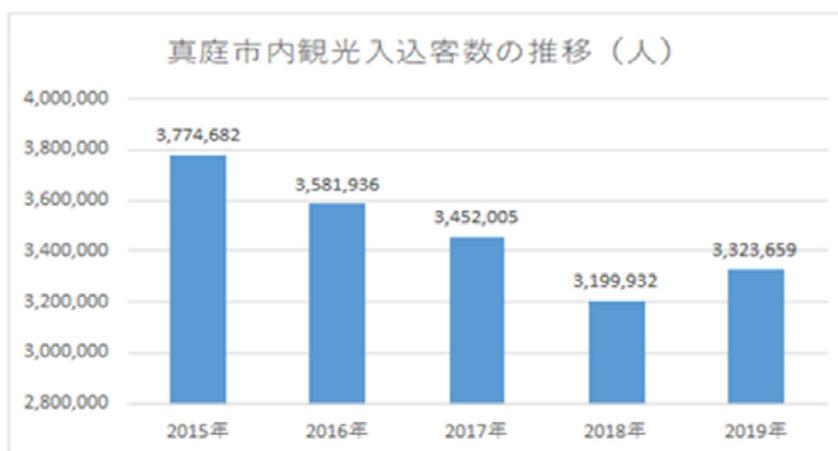
【真庭市の観光客の動向】

①観光客数の推移

真庭市が独自で集計した観光客入込客数調査によると、2015年に377.5万人であり、うち蒜山地域に250万人（66.3%）、勝山・神庭の滝に27万人、落合・醍醐桜に27万人、湯原・湯原温泉に38万人が訪れていた。しかし、2019年には332.3万人となっており、5年間で約45万人が減少している。

要因としては、2018年は7月豪雨災害、全体的には、国内の人口減少といった社会的状況や団体旅行から少人数旅行といった旅行形態の変化などが考えられる。

【図1】真庭市内観光入込客数調査の推移

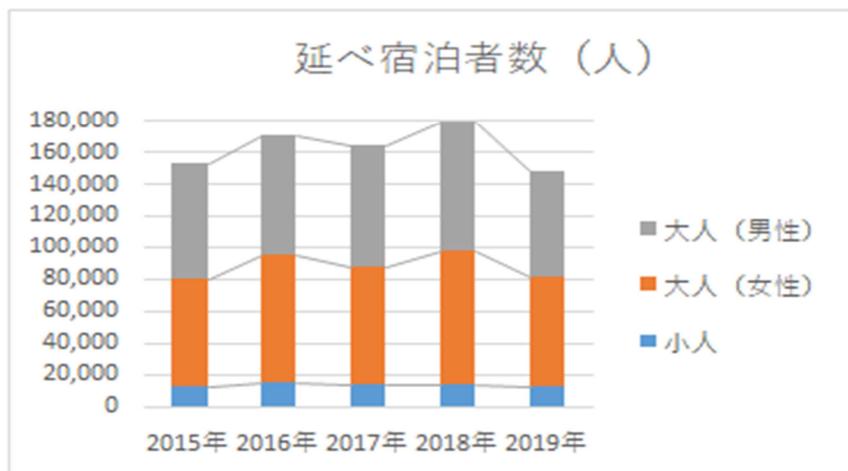


【出所】真庭市観光入込客数調査（独自調査）

②市内宿泊者数の推移

真庭市内への観光入込客数は減少しているが、宿泊者数の落ち込みは大きくはない。豪雨災害のあった2018年には、復興に関するイベントが行われたため宿泊者数が増えた。

【図2】延べ宿泊者数

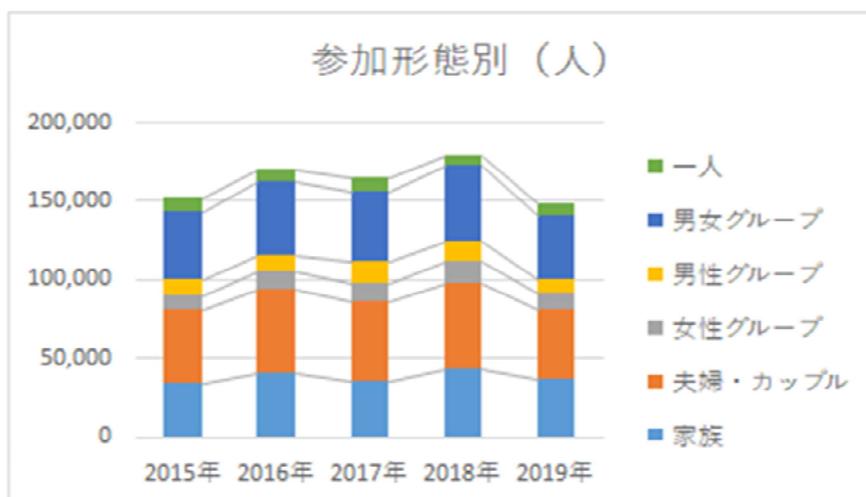


【出所】観光予報プラットフォーム推進協議会「観光予報プラットフォーム」

③形態別宿泊者数の推移

宿泊者を形態ごとに分けて見ると、宿泊のできる観光地が、蒜山、湯原温泉であることから、家族や夫婦・カップル、男女グループでの来訪が多い。

【図3】形態別宿泊者数

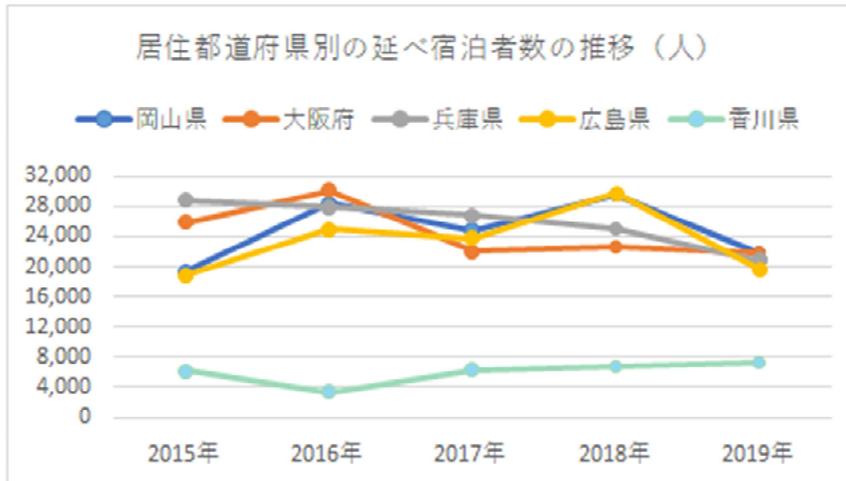


【出所】観光予報プラットフォーム推進協議会「観光予報プラットフォーム」

④発地別の宿泊者数

真庭市内に宿泊した人の発地上位5県は、大阪、兵庫、広島、岡山、香川 となっている。2015年から2017年までに上位にいた大阪、兵庫といった関西圏が低下しており、伸び悩んでいる傾向にある。

【図4】 居住都道府県別の延べ宿泊者数

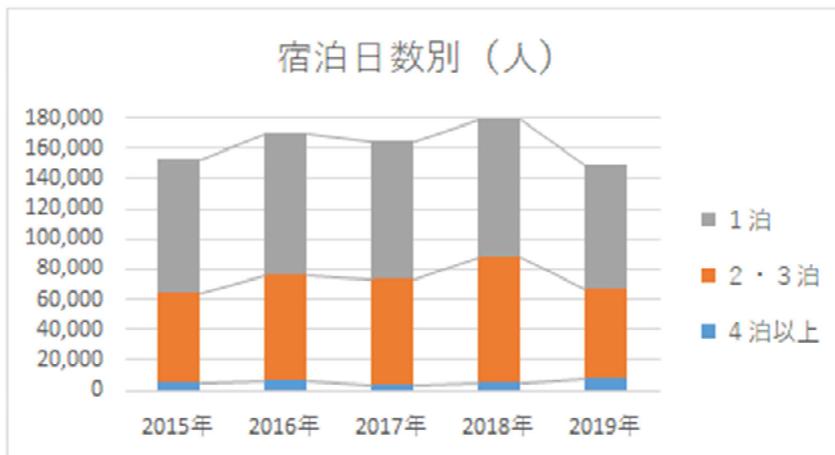


【出所】 観光予報プラットフォーム推進協議会「観光予報プラットフォーム」

⑤ 宿泊日数

これまでの宿泊者の推移から、旅行形態が家族連れであることで週末を利用した1泊の旅行者が多い。

【図5】 宿泊日数別



【出所】 観光予報プラットフォーム推進協議会「観光予報プラットフォーム」観光客の動向を見ると、真庭地域は、近隣県の家族が1泊で旅行が楽しめる場所として選ばれていることが分かる。これからは、各地域が有する自然環境や歴史・文化・産業など多様な地域資源を、景観や伝統行事、食文化などに細分して特産品の開発や、滞在交流プログラムの商品化を一般社団法人真庭観光局を推進母体として、行政と共に作り上げていくこととしている。

そして、それを求める旅行者が滞在し、旅行者へのおもてなしが地域内での消費を生

み、地域の活性化にもつながるよう検討を重ねていく。

また、真庭市観光戦略アクションプランと地域振興計画に記述する取組については、整合性のとれたものであり、真庭市の観光戦略上、重要な位置づけを占めるものである。

3 山村地域活性化計画（美甘地区）

美甘地域では平成27年度に美甘地域活性化推進協議会が農林水産省の山村活性化支援交付金事業を活用し、美甘地域資源活用調査を実施しています。

本調査では、美甘地域における地域資源の調査と、組織づくり、地域製品の販売促進やマーケティングに向けたワークショップ等を実施。人口が減少してもいきいきと暮らせ、若者が定住できる地域振興を目的に、地域の将来の指針となる「美甘地域資源活用ビジョン」を検討、提案しています。

資源活用ビジョンの提案において、「美甘地区には山里ならではの多様な農林水産資源があり、かつ品質にこだわった生産者自慢の加工品がある。しかし事業としての継続性が弱く、多様な生産者が連携して課題解決に取り組むという活気が薄い等の難点がある。」との分析となっています。

一方で、美甘地域の生産者・事業者に共通するのは「美甘という地域を発信したい」「こだわりの産品・自信作を多くの人に食べてほしい」「産品を通じて地域おこしに貢献したい」という思いがあり、美甘には豊富な資源があり、様々な加工品に取り組んできた実績があり、今後は、この思いと実績を各主体が共有し、連携して、美甘ならではの特産品をつくり発信すること、生産・加工・販売が連動して機能するよう、推進体制を構築することが必要であると提案しています。

地域振興計画の策定にあたり、本計画で実施した農産物の生産者ヒアリング実施時のデータも活用し、地域が主体となり活動できる体制、人材育成を進めていきます。

3章 美甘地域の現状と課題

1 観光客の流れ、動き

①クリエイト菅谷

クリエイト菅谷の利用者数の推移

	H27年度	H28年度	H29年度	H30年度	R1年度 (H31年度)
クリエイト菅谷 (単位：人)	14,188	15,058	16,074	15,767	17,597

市内の主な観光施設の観光客数は、蒜山地域、湯原地域とも減少傾向（H27年度比較）であり、クリエイト菅谷においても減少傾向であったところ、再アウトドアブームの効果もあり、平成27年度以降は増加傾向となっています。

クリエイト菅谷の施設オープンから30年近くが経過し、コテージ、バンガロー等の施設改修が必要となっています。指定管理者による施設内管理、維持が続けられていますが、利用者の安全確保、魅力向上、新型コロナウイルス感染症対策にも対応した改修計画も必要となっています。

2 地域資源（観光資源）の活用について現状と課題

1 美甘宿場跡、美甘宿場桜

美甘の宿場の街並み（旧商店街）は承応元年から3年間をかけ、津山森藩が整備したと言われている。参勤交代では、宿場としてより、休憩所として利用された記録も多く、物資の集散など商業活動が主であり、鉄製品、木地などの取り扱いがあり、産業拠点として宿場街が発展してきました。

美甘の旧宿場の街並に沿って流れる新庄川の堤防沿いには約600メートルの距離に新旧の約50本のソメイヨシノが植えられています。

昭和天皇御即位記念として植えられ、その後地元の青年たちや、太平洋戦争に出征する若者たちによって植えられ、終戦後も堤防整備や地域のコミュニティ活動など、その時代の美甘地域の方々の思いをこめて植樹し、現在の桜並木となり真庭市の桜の名所の一つとして地域内外の人の目を楽しませています。

現在の美甘の旧宿場の街並みには、手まりの同好会や地域の住民主体による、創作てまりが軒先に手まりを飾り付け、静かな山村の商店街に彩りを与えています。てまりは出雲の殿

様の参勤の途時に献上された平島地区のてまりを姫君が非常によろこばれたことから「御殿まり」と名付けられたとされています。

現在ではこのてまりの伝統を受け継ぎ「てまり保存会」を中心に創作、展示活動が行われています。

2 ヒメノモチ

ヒメノモチ品種は冷涼な気候を好むため、美甘地域の気候に向いており、山裾の水田での栽培にも適していることから、新庄川流域を中心に生産を推奨してきた。

地域協議会も立ち上がり作付け振興がなされ、現在は美甘地域で約35haが栽培されているが、地域での餅加工を中心に、市場での需要は高いものの生産量が伸びていない状況もある。これは高齢化に加え、栽培の難しさ（倒伏、気候不順）、獣害による被害の増加も要因も加わっています。

このような課題の中、土壌分析、ドローン活用を中心にスマート農機の活用も推進しており、担い手不足の中、省力化による集積も進みつつあります。

3 古代米（有色素米）

美甘地区の古代米栽培は、平成6年に美甘地区内の姫笹原遺跡で出土した縄文時代の土器片に稲の細胞化石が付着していたことが発見され、稲作が行われていたことが確認できる当時最古の遺跡となり、話題になったことから、地域振興とあわせて古代米（赤米、黒米）の栽培が始まり、地域の稲作農家有志が栽培や加工品試作を行ってきました。

現在は美甘地域で約5haが栽培され、主に業者卸、加工品への利用等を行っています。

4 そば

旧美甘村の転作奨励作物として推進され、美甘村、JA 真庭とともにコンバイン導入や買上助成制度などの対策で栽培拡大推進してきました。

現在は、美甘そば生産組合を設立し、生産者は10名、作付け面積は1.7ha。約半数が製粉業者への出荷で、組合代表が中心となり真庭市内で手打ちそばの提供、販売も行っています。またそば粉を活用して、そば加工品の開発、クリエイティブ管谷のそば打ち体験も行っているが、生産者、作付け面積とも減少傾向であり、新規栽培者の増、耕作放棄地等の活用が求められています。

5 山菜

山取が主であるが、半栽培方式も行っています。地域で行っていた山焼き等の山林管理が困難となり、山菜採取も行いにくくなっています。美甘地域に限らず山間地の重要な特産品であり、コゴミ、ワラビ、ゼンマイ等美甘地域に自生し資源量が多い品目を、財産区有林（地

区コミュニティ管理山) の里山の管理、整備を行うことや、山裾の休耕田を活用した獣害リスクを考慮した品目の栽培の検討、地域に伝わる山菜料理の技術や山で増やす技術、保存技術も継承して行く必要もあります。

6 アマゴ

鉄山川の清流を活かした内水面養殖業が40年以上続けられ、現在は1軒のみが養殖業を営んでおり、鉄山川在来のアマゴの孵化増殖・育成を行い、アマゴ5万匹、ニジマス2万匹が養殖されています。

主な流通先は県外出荷となっているが、クリエイト菅谷のつかみ取り用販売や、地域内の老舗料理旅館で提供されており、この旅館が加工販売するアマゴの缶詰や卵の瓶詰め加工品も新たな特産品として注目されています。

7 交通アクセス

交通は鉄道路線は無く、国道181号、主要地方道湯原美甘線、粟谷美甘線およびこれらに接続する市道を介した陸路輸送に限られています。

美甘地域への交通アクセスについて、クリエイト菅谷の入込み客データの分析から見た場合、高速道路からのアクセスが最も多く、久世IC、湯原ICを利用する岡山県南方面からの利用者が最も多くなっています。

また近年は県道改良工事により、北房ICから県道84号線経由のアクセス車両も増えており、今後の岡山道4車線化による岡山県南、広島方面からのクリエイト菅谷利用者アクセス及び蒜山、湯原地域との新たな周遊ルートとしても期待できます。

4章 美甘地域振興のための方向・取組

美甘地域の振興について、諸課題がありますが本計画では特に地域の観光、交流拠点であるクリエイト菅谷と、美甘街並みを中心に方向性を打ち出し、その波及効果による農畜産物の振興にも繋げていきます。

1 クリエイト菅谷の再生整備、振興

クリエイト菅谷は美しい自然や素朴な農山村のたたずまいを生かして、人々の交流を図り、市民の福祉と観光振興のための杜市づくりを目的とし、宿泊施設、体験施設等を備えた真庭市の施設であり、美甘地域唯一の観光・体験複合施設でもあります。このクリエイト菅谷を中心とした美甘地域の観光振興は必要不可欠となっています。

そこで、クリエイト菅谷の再生整備に対して、大きな方向性(ビジョン)を掲げ再生整備を検討します。再生整備のビジョンについては大きく2つの側面から検討します。

側面1は2020年以降のコロナ過のソーシャルディスタンスを中心とした生活様式を取り入れた観光・体験施設としての考え方です。今までの社会環境とは大きく変わった2021年は、地方観光も大きく変化が求められています。その中でアウトドアやグランピングなどの個室タイプの宿泊施設や野外での宿泊施設が大きく観光ニーズを捉えられています。また、海外旅行等に行かれていた高所得者層が、日本国内旅行(近隣観光)へシフトしていることも目立ち、今までに訪問したことのない地域への観光開拓も進んでいます。

側面2は、クリエイト菅谷の設置目的を振り返ることです。地方での再生整備や振興をするうえで一番大切な点が原点回帰の考え方です。「なぜ、その地域に施設ができたのか?」「その地域の強みは何なのか?」「現在に至るまでの背景は何なのか?」を改めて振り返り、クリエイト菅谷が将来どのビジョンを持って再整備・美甘地域の振興に関わっていくのかを理解する必要があります。

上記の2側面からクリエイト菅谷の再生整備・振興ビジョンを3点策定します。

- ① 里山・農村のアクティビティのある宿泊施設
- ② 住んで安心・遊んで安全な施設
- ③ 人の感性と感覚を創る施設

(1) 里山・農村のアウトドアアクティビティのある宿泊施設

クリエイト菅谷のキャンプ場やバンガロー施設を再編し、アウトドア客層とファミリー

層に注力した観光アプローチを策定します。また、茅葺民家については、一棟貸しの高級宿泊施設としてミドルシニア層への観光アプローチを策定します。現状の各施設に顧客ターゲットを明確にし、具体的施策を施設内で展開をしていきます。

参考：高級宿泊施設「平泉倶楽部」



(2) 住んで安心な地域・遊んで安心な施設

新型コロナウイルスの感染拡大にともないソーシャルディスタンスを守った「安心・安全な観光施設」であることが重要視されています。その中で、観光業界ではグランピングやオートキャンプ場などが、アウトドアブームの再流行とともに注目されています。クリエイト菅谷は、里山としての風土を持ち開かれた森林の中で、バンガローやオートキャンプ、貸切り古民家施設などのソーシャルディスタンスを守った宿泊施設としてインフラが整っており、広大な敷地を活かした様々な活用が展開出来ます。その観光資源を活用しアウトドア層・ファミリー層等の観光ターゲットとした施設展開を行います。

(3) 人の感性と感覚を創る施設

施設の名称になっているクリエイト(クリエイティブ)としての施設の在り方です。自然を活かして子供から大人まで、クリエイティブは感性を創造するアクティビティの実施や、都市部の人材と美甘地域の住民がクリエイティブなかかわり方が持てる交流の場としての施設である必要があります。

そのため、地域内外の関係団体が参加できるイベント開催についてはもちろんのこと、食や自然を活かしたビジネスマッチングなど、グローバルクリエイト(※1)を実現する施設として展開します。

※1 グローバルクリエイト：グローバル人材(都市部人材)とローカル人材(地域住民)と一緒に創造する事業

クリエイト菅谷の再生整備と振興は美甘地域の創生の代表的な拠点であり、地域振興に向けたシンボルとなるポテンシャルがあります。そのためにも、グローバルクリエイトの考え方で地域外人材と地域内人材が交じり合い再生する必要があります。

2 美甘の街並み(旧商店街) 美甘宿整備と地域の人材育成

(1) 美甘の街並み(旧商店街)美甘宿整備

美甘の街並み(旧商店街)は承応元年より作られた出雲街道の宿場町として発展をしてきました。その歴史に立ち返り、美甘の旧商店街を「美甘宿」として再整備を計画します。かつて人の往来、農林水産物の流通で賑った旧商店街は空き家も増加し、昔の活気が消えつ

つあります。しかし、情緒ある街並みや小路、川岸には桜並木もあり、昔から変わらず春には満開の桜、夏には川辺の緑の下で避暑を楽しむなど四季を通じて里の風景を楽しむことができます。

そこで、旧商店街すべてを「一つの宿泊施設」として考え、「美甘に泊まろう！！」を合言葉に美甘宿整備計画を検討・実施を進めていきます。



美甘宿場桜

美甘宿整備計画は、旧商店街内にある古民家(空き家)を地域の空き家紹介団体(グランパ美甘)や地域づくり委員会他地域内外と連携を図り、旧商店街内の古民家(空き家)を一般宿泊施設としてリノベーションを図ります。古民家(空き家)1件に対して宿泊施設として登録し、旧商店街内の古民家(空き家)全ての宿泊施設の一室として予約管理はもちろんのこと、施設管理も取りまとめて行います。それにより、施設管理や予約管理などを1本化することができ、重複するコストカットはもちろんのこと、地域での面で観光客等への広報・広告を展開することが可能になります。

また、夕食と朝食の食事提供については、旧商店街内にある「香杏館 micamo café」に提供を一元化し、香杏館 micamo café内での食事かテイクアウトで古民家(空き家)での食事ができる体制計画します。それにより、各古民家(空き家)の改修工事に対して、空き家改修時のネックとなるキッチンエリア等の水廻り改修工事費が圧縮できるほか、施設管理の簡素化が可能となり、事業取組の継続に繋がります。空き家の再生、活用の方向については真庭市空き家等対策計画に則り推進していきます。



香杏館 micamo café

取組について参考として、実際に町全体を一つの宿泊施設として地方創生に取り組み地域があります。兵庫県篠山市の「篠山城下町ホテル NIPPONIA」です。日本における分散型ホテルの先進地域として、丹波篠山の篠山城跡の城下町に点在する古民家をリノベーションし“町全体がホテル”という新しい形のリゾートスタイルを構築しています。



篠山城下町ホテル NIPPONIA

新たな日本のリゾートスタイルとして「分散型ホテル」の展開は、宿場町としての歴史のある美甘地域(旧商店街)の新たな整備計画の柱として実施をしていきます。

また、美甘地域では手まり保存会が中心となり、美甘地域の伝統工芸として手まりの保存が進められており、旧商店街の通りの軒下に手まりを飾り、街並みに彩りを与えています。この市民主体の活動についても地域の伝統、地域観光資源として美甘宿を楽しむアイテムとして美甘宿整備計画に繋げていきます。

(2) 地域の人材育成

地方創生を実現するために必要な要素として「教育」(郷育)が必要となります。教育は地域住民の未来に対するチャレンジ精神を意識的に生み出すための意識啓発教育として必要となります。

そのため、チャレンジ精神を生み出すための意識啓発教育のカリキュラムとして下記のカリキュラム基礎を参考に構築していきます。

カリキュラム基礎			
	テーマ	概要	目的
1	地方創生の成功失敗事例	各分野の先進的な地域や団体の事例を基調講演	・視野を広げる ・モチベーション向上
2	将来ビジョンの作成	美甘地域や各取組の将来ビジョン(夢)を語り作成	・目標設定 ・モチベーション向上
3	現状分析と課題分析	将来ビジョンと現状の課題を明確に表記し現状分析を行う	・課題の明確化 ・行動目標の設定

指導方法	
グループワーク	数人ずつのグループに分かれて、議論と発表などを行う
フィールドワーク	先進地域への視察や交流を行い、実際に現場での議論、地域感覚の吸収を行う
スクール形式	講義形式で講師より研修を受ける。地域議論を深化する

上記の3点のカリキュラム基礎と指導方法を柱として、受講される地域住民のターゲットにあった教育プログラムを作成していきます。

ターゲットに関しては、下記の内容にグルーピングされます。

ターゲットのグルーピング		
担い手地域住民	先人地域住民	自治体職員

地域事業者（個人/法人）	学生（小学生/中学生/高校生）	地域関係者 (市内外関係者、地域おこし協力隊等)
--------------	-----------------	-----------------------------

グルーピングを明確にした上で教育プログラムを実施することで、教育効果を最大化するだけでなく、地域のモチベーション向上をより効果的にします。

地域の人材育成は、地方創生の課題を当事者意識（我が事）として、地域住民全ての方が認識し前向きに行動・吸収・発信をする必要があります。

持続的発展する地域となるためには、外部人材と内部人材の連携と融合が必要不可欠となります。

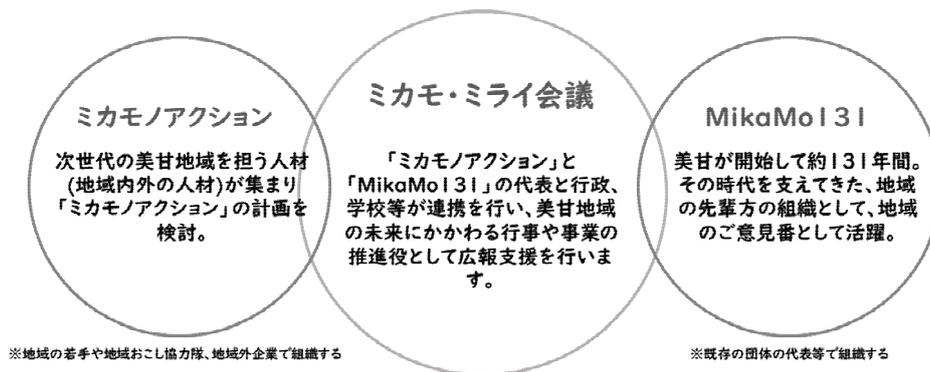
（3）若者アクション（ミカモノアクション）とプレイヤーの育成

ミカモノアクション推進のため地域住民主体の動きを活性化するための「ミカモ・ミライ会議」の立ち上げ

美甘地域の振興をする上で地域住民を中心とした「若者」の力が必要です。美甘地域の将来ビジョンと行動計画を構築し、実際に行動に移すことのできる力が大切です。そこで、若者アクション「ミカモノアクション」を構築し、地域住民と地域外住民の若者が集まり、行動（アクション）を起こすことを目的に実施します。

ミカモノアクション推進を実現するために、地域住民が主体となって動き始める為の仕組みづくりが必要となります。

そのため「若者」と「シニア/ミドルシニア」の2つの層が連携し双方の役割を明確にして推進することが重要です。



「ミカモノアクション」とは、次世代の美甘地域を担う人材(地域内外の人材)が集まり、5年10年の美甘地域のビジョンや活動計画を検討し実施する組織。

「MikaMo131(仮称)」とは、美甘村の誕生から131年間の歴史や伝統を守り続けてきた地

域のシニア・ミドルシニア層の人材。美甘地域の歴史、文化、産業や住み方について、地域の先人として地域活動に対する応援、助言を行う組織。

「ミカモ・ミライ会議」とは、ミカモノアクションと MIkaMo131 の代表メンバーと行政、企業等で構成される組織として、各団体からの活動計画等についての議論や採決を執り行い、現地域づくり委員会の構成団体にとらわれず美甘地域が一丸となれる決定を行う組織。

上記の3団体を発足し、地域住人主体となり美甘地域の活性化に取り組める土壌を創ります。また、地域外人材や企業が美甘地域でスムーズに活動できる機運の醸成、活動しやすい環境整備も行っていきます。

上記の3団体の会議が効果的に運用していくために、会議の参加者がより自発的に行動し発言ができる会議の手法を工夫し展開をしていきます。

ステップ1として、参加者の考えや想い、夢に対して、言葉だけでなく、文字や絵に変換できるワークショップを展開します。

ステップ2として、参加者の考えや想い、夢を文字や絵に書いたものを具体的な物事に変換をしていきます。

ステップ3として、参加者の考えや想い、夢を具体的な物事をいつ、どう実施するのかをスケジュールを引いて実施する計画を考えます。

ステップ4としては、具体的に引いたスケジュールに対して、行動に移していきます。

上記の4点のステップごとに実行することで、行動する組織として活動をしていきます。

Step 1 「声」→「絵」に変換

みなさんの考えや声を絵や文字に書き表す。



Step 2 「絵」→「物」に変換

書いた絵や文字を具体的に見える物にする。



Step 3 「物」→「時」に変換

具体的な物を実現するためにスケジュールを引く。



Step 4 「時」→「こと」に変換

スケジュールを引き行動を起こすこと。

5章 経済波及効果

蒜山地域と連携した観光振興と周遊効果に加え、地域資源を活用した6次化加工について棲み分けを行い、蒜山(真庭北部)地域全体での6次化事業のボトムアップをはかります。

1-1 地域(蒜山、湯原地域)人、資源の連携

地域(蒜山地域、湯原地域)の人材やインフラと相乗効果を図るため、各地域の特質との差別化を図った美甘地域の再生整備を行います。

蒜山地域・湯原地域の観光資源や地域資源に対して、双方の地域と連携をした美甘地域の再生計画を設計します。

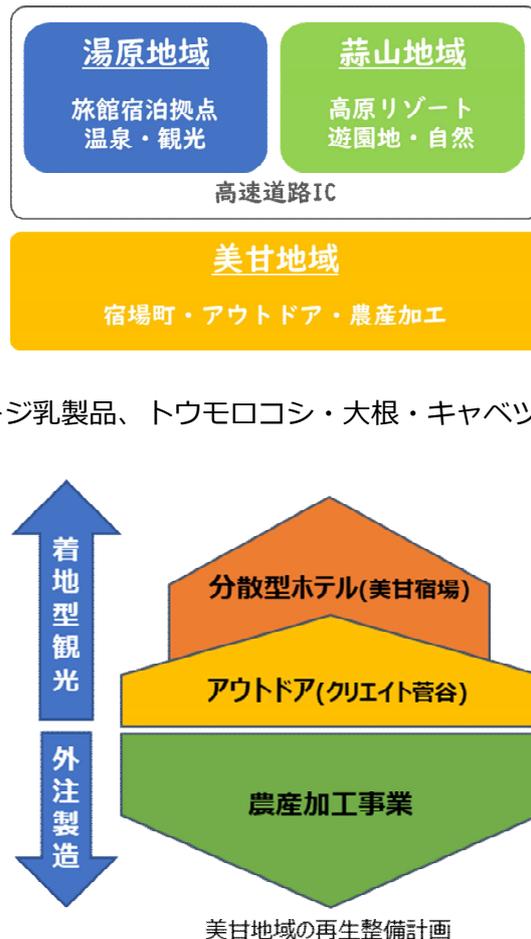
湯原地域の資源として、温泉を中心とした旅館宿泊拠点として真庭地域の観光拠点の一つになります。また、蒜山地域についても高原リゾート地域としての観光拠点としての役割と高原地帯の気候風土を活用した農業生産(ジャージ乳製品、トウモロコシ・大根・キャベツ等)の生産地としての豊富な地域資源を持っています。

2地域の資源との連携が図れる美甘地域の再生整備のポイントとして前章で記載した「宿場町を活用した分散型ホテル」「アウトドアを中心としたクリエイト菅谷」に加えて「廃校や市の遊休施設を活用した農産加工事業の整備」が美甘地域再生整備に必要なポイントになります。

2地域と異なる顧客ターゲットに沿った宿泊拠点と2地域が生産した農産物に対する外注製造(OEM製造)工場の設置を計画します。

また、蒜山地域との連携が図れる人、資源の連携として、現在、岡山県、真庭市、晴れの国岡山農協(旧真庭農業協同組合)が事業主体として実施しているハイブリッドメガ団地の事業を活用してブドウ農家の新規就農者の育成と定着について計画し、前述の農産加工場の整備計画と併せて推進します。

真庭市北部でピオーネ栽培が北限と言われていた時代から地域農家の努力により試行錯誤が繰り返され岡山県北部での栽培が確立した先駆地域である美甘地域で、遊休農地を活用したブドウ担い手の育成と継業を推進するため、移住定住対策と連動した受け入れ体制



を整備します。

1-2 クリエイト菅谷の再生整備と受け入れ体制整備

美甘地域の再生計画におけるクリエイト菅谷は、湯原地域・蒜山地域の宿泊客ターゲットとは異なるターゲティングを行い、3地域の宿泊客の相乗効果を図り振興を図ります。

また、宿泊形態を2地域と異なる手法をとることで、都市部からの宿泊客に対して多様な宿泊形態を提案できる地域として蒜山地域(3地域)全体の魅力発信力を向上します。

○湯原地域:地域資源である温泉を活用した旅館・ホテル形態。明治22年からの歴史のある宿泊地域。

○蒜山地域:高原地域としての豊かな自然の中の保養所やホテルの他に高級グランピングの宿泊地域。

○美甘地域:クリエイト菅谷を活用したアウトドア(オートキャンプ等)と旧宿場町を活用した分散型ホテルの整備。

3地域の宿泊形態の分類



3地域の観光資源が相乗効果を図れるようクリエイト菅谷の再生整備・受け入れ体制整備を計画していきます。

2 美甘地域資源活用と蒜山地域資源の循環、連携

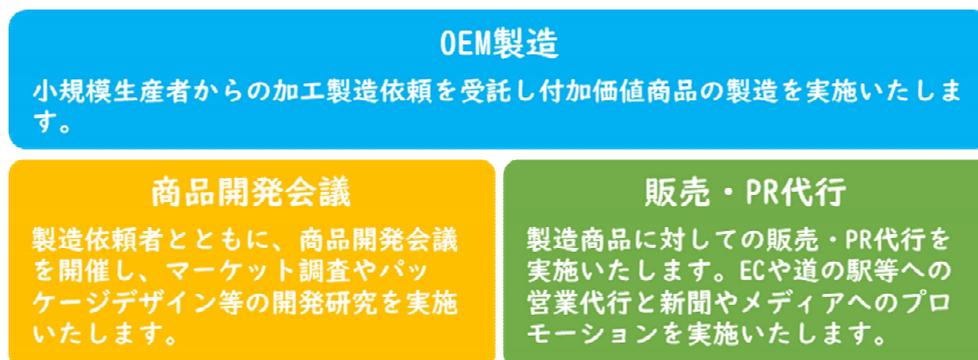
(1) ローカルフードラボ開設

美甘地域の市有施設を有効活用した特産品製造拠点施設「ローカルフードラボ」の開設について計画します。クリエイト菅谷内にある「夢創庵」や美甘地域にある未活用の市有施設を利活用し、美甘地域のみならず近隣地域の小規模農業者をはじめとした販売事業者等の小ロット製造場として開設します。美甘地域をはじめとした近隣地域には小規模生産者が多く、生産物の付加価値化を図ることが非常に大切になっています。しかしながら、小規模生産者が自ら加工場を開設し6次産業化に取り組むには投資や人件費、輸送費、販売先の確保などの課題があります。その課題やリスクを解消するためにも地域資源を活用す



る特産品製造拠点整備が必要となります。また、販売事業者等に対しても試験的製造やマーケット調査などの小ロット製造のニーズがあり、自社加工品の製造オーダーに対して対応できる特産品製造拠点整備は、新たな美甘地域の雇用創造と新産業の創造に繋げていくことが可能性となります。

具体的な特産品製造拠点「ローカルフードラボ」の内容については以下のとおりです。



- ① OEM 製造：小規模生産者等から加工製造業務を受託し、加工品の開発を実施します。
- ② 商品開発会議：製造依頼者とともに商品開発やパッケージデザイン、マーケティング調査等の勉強会や会議(MTG)を実施します。
- ③ 販売・PR 代行：製造した商品に対して、EC や道の駅などの卸先に対しての営業代行を実施いたします。また、開発した商品を各メディア(新聞、TV、ラジオ等)に対してプレスリリースを発行しプロモーション活動を実施します。

上記の3点の業務をローカルフードラボの事業として実施し、美甘地域内外の地域商社的に4章記述の担い手育成による成果として事業展開を計画、美甘地域をはじめとした蒜山地域(真庭市北部地域)の一次生産者の所得向上を図るとともに、美甘地域の特産品開発に繋げていきます。

(2) ヒメノモチを中心とした特産品製造

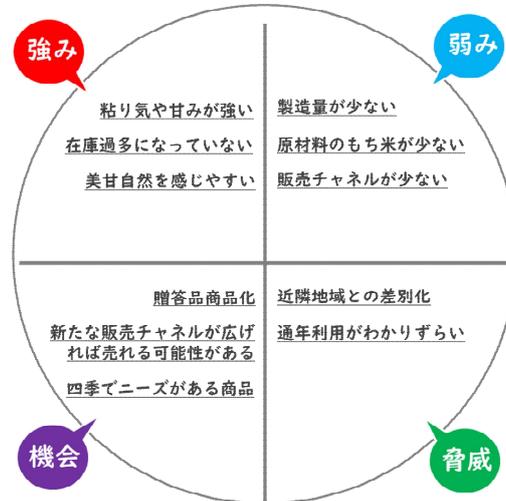
美甘地域の地域資源活用としてヒメノモチがあります。ヒメノモチを中心とした特産品製造として、現在はお餅「美甘ひめのもち」があります。「美甘ひめのもち」はヒメノモチの特徴である粘り気や甘みの強いお餅です。



この製品は他地域のお餅に比べても「粘り気」「甘み」「弾力」が非常に強く感じ、商品の強みとなっています。そこで、ヒメノモチを中心とした

特産品製造と販路戦略を実施することが重要となります。

そのためにも現在の「美甘ひめのもち」の現状分析(SWOT 分析)が必要となります。



上記の SWOT 分析の中で、一番大切な点は「特産品製造後に消費者とどれだけ多面的に接するか」「他地域の同特産品がどのように販売されているのか」を事前に考え、分析する必要があります。そのためにも、販売戦略と市場分析を具体的に立てる必要があります。

2020 年からの新型コロナウイルスの影響により消費者行動の変化は様々な販売戦略面で影響を受けています。そのためにもコロナ過における特産品販売戦略策定の検討をします。

参考として、コロナ過で市場拡大した販売チャネルとして「ネット通販業界」が上げられます。ネット通販業界のようにコンシューマー(個人消費者)へダイレクトにお届けする販売チャネルは今後のコロナ過の主流の販売チャネルになる可能性があります。

ネット通販業界でヒメノモチを活用した特産品製造、販売を推進していき、この分析手法を活用した「美甘ひめのもち」以外の美甘地域の商品開発、製造、販売応用が可能となります。

(3) GREENable (グリーンナブル) ブランドのコンセプトに基づいた商品開発と販路開拓の推進。

サステナブルな社会の実現のために、環境省が進める環境省が進める地域循環共生圏事業をとして、地域・ファッション・建築・行政といった多様なプレイヤーが繋がり、新たなコミュニティを立ち上げた GREENable (グリーンナブル) ブランド。蒜山地域と同様に美甘地域でも豊かな自然環境を活かした自然と共生する農林業が営まれてきました。美甘地域においてもこのブランドコンセプトに共鳴した取組を推進します。